

追悼の記

田中義行

この年令になれば覚悟してはいますが石丸・山澄両氏のご逝去残念です。心から御冥福をお祈りします。殊に昨年の分隊会でお会いした伍長はあんなに元気であったのに今でも信じ難いことです。今回の分隊会は両氏の思いをこめた分隊会でもありぜひ出席したい思いですが、私が主催している町の行事を以前から予定していた、やむを得ず欠席させて頂きます。

松原 一夫

山澄兄とは阪神基地司令の時三回出遇いました。特にスマートさが目立ちました。青年会議所会員であった時兄の特別講演を依頼した時緊急配備で出席出来ないが副官を送るからということもありました。平和ボケしている吾々にはやはり第一線では油断出来ない事件が起きていくんだと思いました。

佐藤 公朗

石丸圭亮生徒にはじめてお目にかかったのは、60年前の昭和20年の4月初め、まだ入校式前のことでした。

一〇二分隊に入隊することに決っていた我々15名は、まだ中学生の服装で、分隊監事の中村大尉の前に並んで、「伍長」の石丸生徒を紹介されました。

その時の石丸伍長の一挙手、一投足、言語。何という美事さ、きびしさ。明瞭さ。見とれると共に、こうなるのには大変だと感じました。そして入校式の朝。今迄の服は全部脱ぎ、新

たに海軍兵学校生徒の軍服を着、短剣も吊って軍帽をかぶり鏡に向って敬礼していい気になったものです。しかし、入校式を終えて、自習室に入ってから。そして寝室では、起床・就寝動作など。全くこれ迄経験したことのない厳格かつ機敏な態度をしなくてはならないこととなり、面喰らいました。特に石丸伍長には洗濯の仕方も教わりました。

その後、石丸伍長は、ナポレオン軍に敗れ、占領された時、プロシヤの哲学者フイヒテが、「ドイツ国民に告ぐ」の演説について述べ、「愛国心」があれば必ず再起すると言われました。

間もなく兵学校は解散になり、生徒たちは故郷に帰ることになったのですが、私の故郷の大連は、もはや日本ではない。帰る所は、まだ一度も行ったこともない、父母の故郷である秋田県の片田舎です。

昭和21年の正月に、私は、3号先任の新昭一生徒のうちをたずねました。そこで、新一家の方々にあついてもてなしを受けましたが、同じ神田の地に石丸伍長がおいでであったので、一緒に訪れ、励まして頂いたものです。

その後、うちの者も引揚げたりして貧しいながら、やがて一軒の家に家族全員住むようになると、私はそのすべての衣服をきれいに洗濯して喜ばれました。石丸伍長のおかげです。

一〇二分隊会が開かれるようになったのは、戦後20年くらい経ってからでしょうか。以後40年、毎年1回は必ず行われ、石丸伍長は、皆出席。いつも元気で、にこにこされていました。私は高校の教師となり、69年の学園紛争の頃は、大いに悩んだのですが、分隊会に出席すると、

そんな不安は吹飛びました。

一〇二分隊では中村教官や石丸伍長から「兵学校の道徳水準は世界一だ。絶対にハレンチな行為はするな。ウソをつくな。言い訳はするな」

と教えられ、愛国心をたたきこまれたことは本当によかった、救われたと痛感しています。石丸伍長の通夜には、渋谷、小灘生徒が参加。翌日の告別式には、中村教官、村山、松井生徒と共に参列。弔詞を読ませて頂きました。75期の宮下季郎氏に、その時お目にかかり、いろいろ、お世話になりました。家族の方々ともお話しすることができました。

山澄暉生徒は、こわい1号生徒なのに、一度もなぐられたことはありません。私は、いつもぼやぼやしていたから、毎日何十発もなぐられていたのですが。しかし、一〇二分隊には幸いにもなぐるのが楽しくて仕方ない、という人はいませんでした。なぐられて、強く、うまくきちんと出来るようになったのですが。

一番の思い出は、就寝直前の時間。この時は1号も3号もなく、気楽に話し合えるのです。その時、

「カシマナダを知ってるか。相撲取りのことじゃないぞ」

といわれました。その頃、双葉山に2度も勝った鹿島灘という幕内力士がいたのです。

「鹿島灘に、アメリカの艦隊が来て艦砲射弾をした」とのことです。それから間もなく、ポツダム宣言の話も聞かされ、やがて敗戦の日を迎えました。

「残念だ」という私に